

# 「お父さんと」

石原 一美（愛媛県新居浜市／32歳 女性）

お父さん、お母さん。

これから私は元気におごころは酒をいじはたを思い存分食くらわていきますか。

お父さんが私たちの前からいなくなってしまうのは、私の結婚式の1週間前、1月16日だったね。

お父さんは結婚式に合わせていよいよ調整のために入院をきそていたところ、緊急入院になってそのまま逝ってしまうもった。今でもお父さんが、「悪い」「一美、あと1日おまなごうだけ、頼む。」と懇願してたじじい、鮮明に覚えています。いしも我慢強いお父さんのあんな苦いような姿を見るのは本当に辛いし、今でも思い出す度胸が痛くなるかも。

お父さんは病気を言われた日から、ずっと苦しんでた。いつ自分が死んでしまうかわからない不安、中々良くなるまで焦る気持ちが、何で自分だけ、そつろいになったら楽になるのか・・・という腹立たしげ。

仮にも私は看護婦なのじい、そんな辛い気持ちをわかってあげられなくって本当にいぬ。病院で働いている時の自分なびきまじいじい、ご家族帰ってみるとまへ々々で、いしも葛藤してた。お父さんの残りの時間を一緒に過ごしたくて新居浜に帰ってきたのに、体調を悪くはかりにいしも「あはは々々、いじいもメメ。」とロクめい言いつ、もつとお父さんといろんな話をたぐえたとおきたかたうって思う。魚のそばき方に始まって、人生のじい、家族のじい、人間関係のじいも仕事のじい、もつとお父さんに教えてほしかったじいがあったんもある。何かになつて気付けたらいい。

お葬式が終わって1ヶ月、正直涙はあつたけど、結婚式はお父さんの希望通りあげたことになりまてた。そつろ、お父さんがいなくなつて、ハーシントンと誰か歩かたごじいじいじい、プランナーの方と打ち合わせをした時です。じいじいじい・・・と中々決まらない中、プランナーさんが何故か突然席を立ち、裏に行つてしまつた。そつろ、ごめいごめいだら果つてきて、目に涙を浮かべていきました。

「お父さん、後いじいさんも。お母さんと一緒に、いじいじいじいじいも。

私は素直に、「あぁ、来てくれたんだ。」って思った。普段ならそんな非科学的な事を言われても信じてないのに、不思議だったな・・・。一緒にいた一樹とお母さん、プランナーさんと4人で泣いてしまったよ。私たちは鈍感で、気付かなかつたから、プランナーさんに伝えてくれたんだって思った。「お父さんらしいな。」って、嬉しかった。

お父さんは生きている時からいじいも約束を守っていた。死んでもいじいもいじいだったんだね。一緒に結婚式に来ていじいもいじい。約束を守つていじい、本当にいじいもいじい。

今、お父さんから引き継いだ命は、私たちの子供へと繋がっています。

私がいじいから進む道、それはいじいのお父さんにしてあげられなかったことを、同じように苦しむ人達に向けてあつていじいです。辛い気持ちに寄り添って、その人の希望に沿った生活を実現できるようにサポートしたい。そつろ、残された時間を家族と楽しむ適じいじい。そんな仕事をライフワークとして、生涯にわたって活動していきたいと思つた。

だからお父さん、いじいから守つていじいください。

途中、辛くなったらお父さんの事を思い出つて。

きょうこそお父さんいじいさんいじいさん。



白い羽根のポスト